



## 私も京都外大図書館を応援します(6)

展示会目録へのこだわり、  
それが教育と研究に対する図書館からの思い入れ

きた ひろこ  
喜多 比呂子さん



印刷会社のデザイナーをされている喜多さんに、本学図書館が昨年の秋に開催した稀覯書展示会の目録『日本で知られたドイツの世界』を創っていただいた。

「普段はお客様と接する機会は少ないのですが、この目録を創るときは何度も京都外大へ出向き、お考えを直接お聞きして一緒に創り上げるかたちをとりました」と振り返られる目録の表紙は、古城とライン川の流れ、ヴェルツブルクの荘厳な建築、そして伝統的なドイツ花文字を配して、国旗の色である黒、赤、金の三色がペール状にかけられた見事なもので、展示会を見学に訪れた方々から好評を博した。

「これまでに美術館の図録等を担当した経験はありますが、大学図書館の稀覯書展示会の目録を創らせて頂くのは初めてです。京都外大図書館が、このような貴重書を数多く持っていらっしゃることは全く知りませんでした」。お陰で展示会の概念を強く表紙に打ち出していただけだが、「目録の表紙に、これだけのこだわりを見せられるところは珍しいのです」。確かに、ライン川と古城の組み合わせの図柄には、こちらが細かく注文をつけたのを思い出す。「それが、京都外大の教育と研究に対する図書館からの思い入れなのではないでしょうか」とお誉めいただいた。

現在のお仕事に就かれて数年経つそうだが、学生時代はデザインを専攻されたといわれる。「卒業制作は、地球温暖化を緑化で緩和させるプロジェクトを仮定し、ポスターやイベント用Tシャツ等を創りました」と思い出を語られ、「デザインで人の意識を変えることが現在の自分の取り組みです。大袈裟かもしれませんが、デザインで、生活している環境や、社会がよくなれば、素敵なことだと思います」と、喜多さんの思想の一端をご披露いただいた。

そして、「デザイナーは芸術家ではないと思います。自己満足で創るのではなく、受けてがあつてのデザイナーです。お客様や社会に満足していただかないと何にもなりません」。このお気持ちが、本学図書館の稀覯書展示会目録の見事な出来栄えにつながったのである。

お仕事忙しい中、ラジオ講座を通じてイタリア語、英語、中国語を勉強されている。「大学生の間は自由な時間がたくさんあります。専門知識は当然ですが、学生という立場を利用して、様々な分野の知識と教養を身につけることが可能です。学内の立派な施設もおおいに活用されてはいかがですか」と、明るい笑顔で励ましていただいた。

.....  
趣味は様々な分野の美しい本や雑誌を集めること。

(文・奥 正敬)